

トマト黄化病の発生について

病 害 名 : トマト黄化病

病原ウイルス : *Tomato chlorosis virus* (ToCV)

発 生 作 物 : トマト

1. 発生確認の経過及び県外での発生状況

- (1) 平成 25 年 1 月に、県央、県南ならびに県西の 4 市町の促成栽培トマト圃場において、葉に黄化や壊死などの症状が発生し問題となった(写真 1, 2, 3)。発生圃場からトマトの罹病葉を採取し、茨城県生物工学研究所生物防除研究室で、遺伝子診断並びに塩基配列情報等の解析を行った結果、*Tomato chlorosis virus* (ToCV) によるトマト黄化病と同定された。
- (2) トマト黄化病の国内における発生は、平成 20 年に栃木県、平成 22 年に群馬県、平成 23 年に熊本県、平成 24 年に鹿児島県及び福岡県で確認されている。

2. 病徴

発病初期の葉では、退緑した小さな斑紋を生じる(写真 2)。さらに症状が進展すると、生理障害(苦土欠乏症)に似た症状を呈し、葉脈に沿った部分を残して葉全体が黄化し、壊死やえそ斑点症状を生じる(写真 3)。



写真 1 株の下段～中段に発生した葉の黄化症状



写真 2 葉の初期症状



写真 3 葉の黄化が進んだ症状

3. 伝搬方法等

本ウイルスは、クリニウイルス属のウイルスで、現時点でタバココナジラミ（バイオタイプQ及びB）及びオンシツコナジラミによって媒介されることが確認されている。これらの媒介虫が本ウイルスに感染した植物を吸汁することでウイルスを獲得し、ウイルスの媒介能力は数時間から数日間持続される。経卵伝染、汁液伝染、種子伝染及び土壌伝染はしない。

4. 防除対策

- (1) 発病が認められた株は伝染源となるため、速やかに抜き取ってビニール袋等に入れて密封し、株を腐らせてから処分する。
- (2) ハウスの開口部には0.4mm目合い以下の防虫ネットを設置し、コナジラミ類のハウス内への侵入及びハウス外への飛び出しを防止する。
- (3) 育苗中に感染すると被害が大きくなるので、トマトの苗を0.4mm目合い以下の防虫ネットでトンネル被覆する等、コナジラミ類の侵入防止を徹底する。また、育苗時から粒剤（表1）を施用する等によりコナジラミ類の防除を徹底する。さらに、粘着板の設置も有効である。
- (4) コナジラミ類は葉裏に多く寄生するため、薬液は下方から吹き上げるよう丁寧に散布する。散布薬剤については表1を参照する。
- (5) 栽培終了時には、ハウスの開口部を閉めた状態でトマトの株元を切断するか株を抜き取り、その後、ハウスを密閉して蒸し込み処理を行う（蒸し込み処理はコナジラミを死滅させるため、結果としてコナジラミ類の飛び出し防止につながる）。
- (6) 雑草はコナジラミ類の生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。

表1 トマトのコナジラミ類に登録のある主な薬剤（平成25年3月1日現在）

薬剤名	有効成分名	系統名
アルバリン／スタークル粒剤	ジノテフラン	ネオニコチノイド系
アルバリン／スタークル顆粒水溶剤		
ベストガード粒剤	ニテンピラム	
ベストガード水溶剤		
アニキ乳剤	レピメクチン	マクロライド系
コロマイト乳剤	ミルベメクチン	
コルト顆粒水和剤	ピリフルキナゾン	その他
サンマイトフロアブル	ピリダベン	

※農薬を使用する際は、農薬ラベルを必ず確認して記載されている使用基準を守るとともに、周辺作物への飛散（ドリフト）に注意して下さい。また、薬剤散布は防除着を着用して作業の方向を考慮するなど薬剤を吸い込まないよう注意して行って下さい。なお、薬剤により粒剤処理や散布など使用方法が異なるので注意して下さい。